

[様式14]

(対象事業：子どもを対象としたミュージアム事業及びその開発にかかる事業)

事業名：移動文学館を活用した教育普及事業

事業者名：財団法人 せたがや文化財団
世田谷文学館

連携事業館名：世田谷区、世田谷区教育委員会

住所：157-0062 世田谷区南鳥山1-10-10

TEL：03-5374-9111

FAX：03-5374-9120

HPアドレス：<http://www.setabun.or.jp/>



①施設概要

「遠藤周作展」「井上靖展」のといった世田谷ゆかりの近代文学を代表する作家や「沢木耕太郎の旅展」など活躍中の作家をはじめ、漫画をテーマとした「美内すずえとガラスの仮面展」ほか、企画展はジャンルの枠にとらわれない。また「不滅のヒーローウルトラマン展」などは家族連れで賑い、全国公立文学館で最も来館者の多い館の一つ。

②事業の意図目的

(1)読書への興味を喚起する。(2)展示写真を教材として活用し、写真により触発される印象や考えを文章にまとめたり、イメージ表現を助けるプログラムの開発を行う。(3)世界のさまざまな国への関心や興味を引き出す。(4)美しい写真や文章を味わうことにより豊かな想像力と感性を育む。

③事業概要

(1) 名作文学を題材とした写真展について

解説用教材として、児童・生徒向けにやさしく解説した補助パネルを制作するなど、内容の充実をはかる。クイズを掲示し、ワークシートを作成して配布して児童・生徒の興味を喚起する。

(2) ブックトーク、おはなし会について

教師、学校図書館司書、ボランティアと協力し、写真展のブックトークやおはなし会を行うことで、子どもたちの読書環境を豊かにするためのネットワークを形成する。

(3) ワークショップについて

写真パネル展示を行う小中学校で、各分野の専門家を講師に招いたプログラムを行う。新鮮な視点でものを観る、柔軟な思考で考える姿勢を身につけるよう指導する。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト ワークシート (ブックトーク用など)

その他 (アルプスの少女ハイジパネルシアター、宮沢賢治解説パネル)

作成した報告書等

ビデオ () 冊子 (様式11) その他 ()

⑤参加者状況

参加者人数 延べ7637人 (但、学校に出入りする地域住民の数は把握していない)
内 訳

(1) 写真展観覧者数

児童・生徒4136名 保護者2485名 教職員315名 教育関係者他 106名

(2) ワークショップ、ブックトーク参加者数 657名 (参加者人数に加算せず)

(1) 事業の実施状況について

①世田谷区立代沢小学校 10/3～11/6

写真展「クマのプーさんと魔法の森へ」

○写真家・中川祐二氏によるワークショップを開催 ※後出(5) 参照

②世田谷区立奥沢小学校 9/21～10/31

写真展「宮沢賢治幻想紀行」

*『銀河鉄道の夜』のアニメ上映を実施(1～4年生)

*保護者による読み聞かせ ※(2) 参照

*アニメ上映の後、学校教師指導により、

「雨ニモマケズ」を児童自身の考案による振付け
で暗唱、『風の又三郎』の文章を群読(4年生)

*学芸員によるブックトークを実施(5年生)



②振り付きの「雨ニモマケズ」。“難しいけど、
(観る人に)通じるといいねと指導しました。”
(教師談)

③世田谷区立砧南小学校 10/4～12/4

写真展「アルプスの少女ハイジ」

④世田谷区立経堂小学校 10/25～11/20

写真展「赤毛のアン・プリンス・エドワード島への旅」

○児童文学研究家・浅田千恵氏によるワークショップを開催 ※(5) 参照

⑤世田谷区立深沢小学校 11/8～1/6

写真展「クマのプーさんと魔法の森へ」

*学芸員によるブックトークを実施(1、2年生)…PTAの参観があった。

⑥世田谷区立駒繫小学校 11/21～12/26

写真展「赤毛のアン・プリンス・エドワード島への旅」…外部評価委員が観覧した。

*学校主催でボランティアによるおはなし会を開催

⑦世田谷区立深沢中学校 1/8～3/25

写真展「クマのプーさんと魔法の森へ」

◆世田谷区教育ビジョン推進研究開発校(研究主題「学校図書館の活用」)研究発表
会に併せて展示。他校校長を始めとした教員のほか、教育委員会職員、地域の教育
者も観覧した。

○写真家・中川祐二氏によるワークショップを開催 ※(5) 参照



写真展鑑賞風景(⑨烏山中学校)

⑧世田谷区立奥沢中学校 1/9～2/26

写真展「シャーロック・ホームズの倫敦」

⑨世田谷区立烏山中学校 2/28～3/24

写真展「シャーロック・ホームズの倫敦」

*教師と学芸員によるブックトークを実施。

(2) 地域との連携について

教師との協力により、多くの小学校で〈学校公開週間〉に展示期間を設け、保護者以外の地域住民も展示を観覧できるようにした（具体数を把握していないので、参加者人数には数えていない）。②の奥沢小学校では、PTAの「おはなしの会」の協力により、『やまなし』の朗読が児童の保護者（ボランティア）によって行われた。また《学校便り》や《学校公開週間のお知らせ》に写真展の情報が掲載され、地域回覧版等で近隣住民に告知した。

また、世田谷区教育委員会との連携により、学校図書館司書教諭研修会で、移動文学館の広報用資料（別紙）を配布、PRした。

平成18・19年度の世田谷区教育ビジョン推進研究開発校《研究主題「学校図書館の活用」》である深沢中学校から依頼があり、同校研究発表会の講演者として、世田谷文学館より区内在住の芥川賞作家・三田誠広氏を推薦した（演題は「読書のよろこび」）。当日は広報用資料を配布した。

(3) 成果物について



BI サイズ2枚のうちの1枚



裏はフランクフルトの場面。イーゼルに乗せて利用

教師から、宮沢賢治は昨今の小学生児童には難しいという声が多くあったため、ブックトークでの反応などを参考にし、児童・生徒に親しみやすい解説パネルを制作した。また、おはなし会をしてほしいという要望に答え、かつ内容のバリエーションを増やすため、アルプスの少女ハイジのパネルシアターを制作し、館内のジュニア向け「ハイジ」映画上映会で試験的に上演した。

ブックトーク毎に児童・生徒向けのプリントを制作した（別紙）。『クマのプーさん』のワークシート（プーとクリストファー・ロビンの会話形式）も制作した（別紙）。

また、学校という環境では監視の目が行き届かず、展示パネルやパネル運搬用ケースが壊れることも多いため、破損していたパネルの改良や、運搬用ケースの強化を行った。

(4) 参加者の反応 ～写真展とブックトークの感想～

●写真展《宮沢賢治幻想紀行》(図1)

「宮沢けんじさんが作ったお話は、本当にないまぼろしのお話ばかりで、すごい表現力を持っていると思いました。」
 「こわい物、きれいな物、たくさんあって楽しかったです。」
 「(よだかの星の) さい後の『これがさい後でした』っていうところが、この地球にいん石おちたみたいなきがしました。」

○ブックトーク《宮沢賢治の作品を読んでみよう!》

「ブックトークをしてくれるまで、ほとんど、宮沢けんじさんの事をしらなかったけど、してもらってよくした。注文の多い料理店がとても、きょうみをもった。」(小5)



図2

●写真展《赤毛のアン・プリンス・エドワード島への旅》

「(アンが) 日本に紹介された頃の訳者のお話など興味深く、写真も美しく、(アンが) まるで実在の人のように感じられた。」(保護者)

○質問“何故このパネルが好きですか?”

「木が道をつくっているようで印象的だから(図2)。」
 「青い空のなかにぽつんと家が2軒あって青い空にのみこまれているかんじだから。」(小6)

●写真展《シャーロック・ホームズの倫敦》

「ロンドンの建物がおもしろい! 日本にはないような形をしている。」(中2・女子)

○ブックトーク《シャーロック・ホームズのドラマを観てみよう!》

「シャーロック・ホームズがいかにいろいろなことに精通し、有能なのかが分かった。
 又、ホームズはユーモアのある人格であり、親しみやすいストーリーだと思った。」
 (中2・女子)

●写真展《クマのプーさんと魔法の森へ》

「本当にプーさんのまちにはいったみたいでふしぎなかんじ。プーさんには、ともだちがいっぱいいいていいな。プーさんの村に人がいっぱいあそびにくるんだなー。」
 (小4)

「フクロの気持ちを考えて、幸せにくらせるようにしてくれるコブタがいいと思います。カトルストーンパイという言葉をよくうまくかけてすごいです。」(小4)

●写真展《アルプスの少女ハイジ》

「ハイジはかわいいし、ゆかいな物語! おじいさんともみの木がある山小屋に仲良くしているのがいいな。」(児童)

「ハイジはお父さんとお母さんをなくしたから可哀相だと思った。でも、新しい暮らしが始まったと思いました」(児童)

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

これまで館の予算だけでは叶わなかった、専門家の講師を招いて、材料・道具を利用したワークショップを行うことができた。

- A. (1) ①の代沢小学校では、[国語]と[総合的な学習の時間]の授業の一環として、《1枚の紙に写真とことばをレイアウトしてみよう!》を行った。実際にイギリスのアッシュダウンフォレストでパネルの写真を撮影した講師の中川祐二氏の話に直接触れ、「クマのプーのことが写真を見ただけで思いうかんできた」「くもの写真や太陽の写真がとってもいい所でうまくとっているなとかんしんして、それを見るだけで気持ちがリラックス、ゆったりできました。とてもいんしょうてきです」(全て小4児童)など、児童がより深く写真展を鑑賞するようになった。制作した作品は同校の児童作品展(いわゆる展覧会)で展示され、保護者や地域の来場者が念入りに見学していた。4年生は作品展に他の作品もいくつか出品したが、児童のランキングで「一番自慢できる作品」になったとのこと(担任教師談)。



A. 作品を熱心に観る保護者や地域住民

- B. (1) ⑦の深沢中学校でも、中川氏のワークショップ《1日カメラマンになって、友達を取材してみよう!》を行った。学校近くの公園で、来ていた地域の人たちを交えて撮影しながら、伸び伸びと撮影ができた。プロの写真家の指導によりインタビューを行い、聞き書きの手法を学び、取材者のことばで文章を書いた。完成した作品は校内に展示された。「駒沢公園で友達と写真をとったり、おかしら(中川氏の愛称)から色々アドバイスを貰えたりとても楽しかった!!」(中1・女子)

- C. (1) ⑤の経堂小学校では、《赤毛のアン》の気持ちになって、帽子に飾りをつけてみよう!》を行った。「アン》の気持ちを考えながらざりをつけてやると、てまどっていたのに考えがうかんで、出来るようになりました。(5年生・女子)」に類似した意見が多くあり、物語の主人公の気持ちを考えることで児童の想像力を喚起した。用意した造花は過去の企画展で展示具として使用したものを再活用、館職員の自宅にあった不要なミニオモチャのリサイクル、児童に呼びかけ、いらなくなった母親のブローチを持参させるなどもした。授業ではなく、[クッキングアンド手芸クラブ]の時間というのも新しい試みであった。



C. アンが、道端に咲く花で帽子を飾るエピソードになぞらえた。

(6) 新聞記事等

マスコミへの露出は特に無し(深沢中学校の研究発表紀要に移動文学館の情報が掲載された。)